		ことばを続けて文を作る	三 ①	65.6	
			②	77.9	71.8
		文を続けて文章を作る	四	33.0	33.0
		段落の区切りが正しく主題要旨の明確な文章を書く	五 1	50.5	
			2	26.8	
			3	21.6	33.0
	計		12		52.1

2. 結果の考察

〔1〕概　　観

	文　字	語　句	文・文章
読　む	59.0	58.0	54.1
書　く	46.6	59.8	52.1

上の表は、この診断標準学力テスト問題の、各領域ごとの平均正答率を示したものである。この表をもとにして概観すると、次のようなことが言える。

(1) 各領域の正答率が、比較的平均化している。

この表を見ればわかるとおり、各領域ごとの正答率は、比較的平均化していて、53を中心に±7の範囲内に集まっている。ということは、指導領域によって、それほど極端な落差がないということになるわけであるが、内容をもっと詳細に分析していくと、幾つかの問題点が引き出せそうである。

(2) 読解能力と表現能力とを対比させて見ると、前者の方が概して高く、後者の方が割合に低い。

正答率が比較的平均化しているとはいっても、その内容に立ち入って見ると、多少の高低の波が認められる。

その中でも最も高いのは、「書く」の語句で正答率59.8％、以下「読む」の文字、語句、文・文章、「書く」の文・文章、文字の順となり、最後の「書く」の文字の正答率は、46.6％になっている。

これら6領域の正答率の傾向を、読むことと書くことの二つに大別して考察すると、「読む」の文字、文・文章の正答率は、「書く」の文字文・文章の正答率と比べて高く、語句については、両者ともだいたい同じである。

このことから、一般的にいって、読解指導はかなり効果的に行なわれているが、表現面についての指導は、更にいっそう強化していかなければならないということになる。

(3) 文字の正答率が、「読む」・「書く」とも他の学年に比較して低い。

前掲の表に提示した6領域の正答率を、こんどは前後の他の学年のそれと比較してみよう。（3年・5年の概観表を参照）すると明らかになることではあるが、「読む」・「書く」ともに、語句や文・文章の領域では、それほどの大きな変化はみられない。がしかし、文字の領域では、注目すべき差異が認められる。

すなわち、「読む」の文字は、3年で62.7 5年で69.7であるのにたいして、4年では59.0である。また「書く」の文字は、3年が5